雲晴

お盆号

「雲　晴」第二十七号
平成三十年七月一日発行

貞林院　瑞正寺
〒125-0041 東京都葛飾区東金町五―四六―五
電話（〇三）三六二七―三四一一
FAX（〇三）五六九九―五九一五

おしえの花束

もうすぐお盆

七月、八月はお盆の季節ですから、お寺へのお参りも多くなります。先日も、昨年お姑さんを亡くされて新盆を迎えるというEさんがおいでになりました。Eさんは、八年もの間寝たきりだったお姑さんを、愚痴一つ言わずお世話をされた気丈夫なご婦人です。

お姑さんがいよいよ危ないということになり、親族の方が集まりました。五人の子持ちであったお姑さんでしたから、お孫さんも入れると大勢の親族です。突然のお客の接待にEさんは大忙しでした。何回もの食事の世話で疲れているEさんの耳にこんな会話が入ってきました。

「お姉さん、もっとやさしく看病してくれたら、あと二、三年は生きられたわよ」

この声はお姑さんの長女Cさんでした。

「食べたいものも食べず、行きたいとこにも行けず、お母さんかわいそう……」

これは先日嫁いだばかりの末娘のAさん。

こんな声を台所で聞いたEさんの胸は、悲しみでいっぱいになりました。

お医者さんの言葉に、いよいよお別れが近いことを悟った親族がお姑さんのそばに近寄ると、お姑さんがやせた手を差し出しました。その手をだれもが握ろうとすると、お姑さんは〝違う、違う〟といわんばかりに手を握らないのです。最後に残ったのは長年お世話をしたEさんだけになりました。そっとEさんがお姑さんの手に触れた一瞬、強い力がEさんの手を握り締めました。けれど、それはほんの一瞬のことでした。すぐさまお姑さんの手から力が抜け、それっきりでした。

あれから一年、Eさんの掌には今も暖かく強い、お姑さんの手の力が残っています。Eさんに申し上げました。

「Eさん、お姑さんは幸せな方でしたね。あなたのおかげで、ほんとうに心おきなく旅立たれたに違いありません」

さまざまな思いを抱いて、お盆が始まろうとしています。

●恩を知る●

念佛院住職　中野良平

仏教では自分以外のすべてのご恩によって私達は生かされる身であることを強調します。特に私達、浄土宗におきましては総本山を知恩院、すなわち恩を知るお寺と申し、恩を知る心を大切にいたします。恩という字を分解すれば因と心であります。私達が今日こうしていられる原因を尋ね、そのことをしっかりと心の上に置くことを表しております。

お釈迦様はある日、信者に対して六法礼経を説かれました。「人はまず東を向いて父母の恩に感謝し先祖のおかげを喜ぶべきである。次いで南を向いて師の恩を礼拝し、終って西に向かって夫婦・家族のおかげを喜び、四番目に北を向いて兄弟、親戚、友人のおかげに感謝し、次いで下に向かって自分の仕事を手伝ってくださる人々のおかげを喜び、最後に上に向かって礼拝し仏のご恩に感謝することが大切である」と人生の大道を教誡されました。大切な方々のためにお墓参りやご法事をお勤めします。

普段、生活をしていますと、私達は自分で生きていると思いがちですが、父母をはじめ多くの方々によって今この身があるということ、私達は生きるために栄養という名のもとに多くの生き物のいのちをいただいているということに「気付かせていただく」このような感謝の気持ちになって生活をしていただくことが、大切な方々への何よりの供養になるのではないかと思います。

民話の小箱（富山県）

そば屋に婿入りした雷

●おもろい話

昔々、ある山の峠に一人のきれいな娘が住んでいた。この娘、身寄りがなく、たった一人で峠のそば屋を営んでいた。

ある日のこと、にわかに雲行きがあやしくなり、やがて雷とともに大雨が降り始めた。娘は雷が恐かったので戸締まりをして家の中で小さくなっていた。すると、なんと空から雷様が落ちて来たのだ。

雷様はそば屋の暖簾を見てそばが食べたくなったので、そば屋の戸を叩いた。娘は雷様を見て驚いたが、そばを出さないと自分が食べられてしまうと思ったので、雷様にそばを出すことにした。

雷様はそばを食べ終わると、娘が一人ぼっちなのを見て、おっとうやおっかあは居ないのかと尋ねる。すると、娘はここに一人で住んでいると言うのだった。娘のことを不憫に思った雷様は、何と自分を婿にしてほしいと頼んだ。娘は恐ろしさのあまり、この話を承知してしまった。

こうして、雷様はそば屋に婿入りしてそばを打つようになった。この話はたちまち村中に広まり、雷様の打つそばを食べようと、あっちの村こっちの村からと客が押し寄せたので、店はたいそう繁盛した。

ところで、この噂を聞きつけたお月様、自分も一度雷様の打つそばを食べてみようというので、ある夜そば屋に降りて来た。雷様の打つそばがおいしかったとみえて、お月様

一口法話

「行く先が見える」

一人の老人が住んでいました。勤勉で正直者でありましたが、親族もなく地位や財産のない貧しいお方でした。

野良仕事の帰り道にお寺の門前で、手を合わせる老人の姿を見た若者たちが「ナァ、爺さんよ、お前は人と生まれて金もなければ名もなくて、なんと甲斐性のない生活をしているのか。働きずくめで、朝夕、行き帰りには寺の前で念仏称えて、なんとつまらない一生か」「爺さんを銭の値にかえれば最低の一文銭」と軽蔑の言葉を投げつけます。

一心に拝んでいる老人に、愛想をつかせた若者たちが立ち去ろうとしたときに「ワシが一文銭なら若い衆、お前さんたちはどれ位の値か」と老人は声をかけます。

若者たちが「おれたちには未来があるから金ピカピカの小判だ」と答

はそば三杯をたいらげ、三十文を払うとまた夜空に帰って行った。

さて、この話はお日様の耳にも届き、今度はお日様がそばを食べに降りて来た。お日様はそばをおいしそうに食べ、次々におかわりをする。そして食べに食べて三十杯、そばが無くなったところで、代金一文を置いて空に帰ろうとする。

一文はいくらなんでもひどいので雷様が呼び止めると、

「お月様は、いくら置いていった？」

とお日様は尋ねる。雷様が三十文ですと答えると、お日様は、

「月に三十文なら、日に一文でねえか？」

と答えた。雷様はしばらく考え、

「そうか、ひと月は三十日だから、お月様が三十文ならお日様は一文でいいんだ！毎度ありぃ！」と納得してしまう。

こうしてお人好しの雷様はお日様にまんまと騙されてしまったが、それを気にする訳でもなく、その後も一生懸命働いたので、そば屋はいつまでも繁盛したそうだ。

商売繁盛笹もって来い

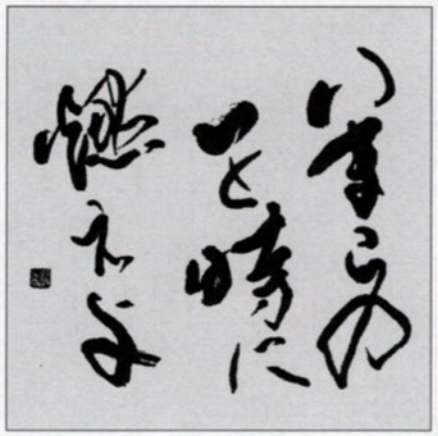
えると「一文銭は穴が開いているから先が見える。小判はその輝きで行く先が見えんだろう。つまずいてころばぬように気をつけてな」と諭したそうです。

宗祖法然上人は「七珍万宝は蔵に満てれども益もなし」と、この世で得た財産は、後の世には何の役にもたたないと仰せになられ、行く先を見据えた信仰生活をお勧めになっておられます。

その信仰生活とは、阿弥陀さまの「我が名を呼ぶものは、必ず救う」のお誓いを信じ、「南無阿弥陀仏」のお念仏をお称えする外にはありません。行く先は「西方極楽浄土」！

（総本山知恩院布教師会ホームページより）

書への誘い



「いまこの一と時に燃えよ」

故林　錦洞　書

貞林院瑞正寺　住職　林　清方

行草書で書かれたこの言葉の意味をどのように受け取りますか。「限りある命、一瞬の尊さに気づき与えられた瞬間を大事に生きよ」と言う事でしょうか。

禅宗のお寺には木版という鳴り物があります。雲水と呼ばれる修行僧は道場への入門、座禅の開始、洗面や就寝などの時間をこの木版が叩かれる音によって知らされ生活しています。

この木版には「生死事大　無常迅速　各宜醒覚　慎勿放逸」という偈文が書かれています。

この偈文の意味は「生と死は誰にも避けられない真理であり、時間は無常にもあっと言う間に過ぎてしまう、故に一人ひとりがこのことに気づいて、勝手気ままに時をむなしく過ごしてはいけませんよ」というものです。

きっと修行僧たちはこの木版の音を聞くたびに「正に今このひと時を大事に生きねば」と言う思いで自らを戒めているのだと思います。

私たちはともすると毎日の生活を当たり前のように過ごしがちで、自分にも必ず死が訪れるという事実を常日頃より意識している人は少ないと思います。

歳月は人の意志とは関係なく過ぎ去ります。目先の快楽に流され、漫然とダラダラと生きていれば折角の命も無為なものになってしまうでしょう。今生かされているこの命を常に精一杯悔いのないように燃焼させることが大切です。

七月・八月のお盆法要

本年のお盆法要は次のとおりです。
毎年お参り頂いている月のお盆法要にそれぞれご来山下さい。

○七月お盆法要
七月十五日（日）午後二時より

○八月お盆法要
八月十三日（月）午後三時より

八月のお盆は毎年お棚経参りにお伺いしております。
本年の地区は金町と三郷地区にお伺いします。
なお新盆でお棚経をご希望の方は早めに寺までご連絡下さい。

「秋の団参（仙台浄土寺参拝）のお知らせ」

秋の団参が左記のとおり決定いたしましたので、お知らせいたします。詳細につきましては同封の団参ご案内をご覧下さい。

日時　平成三十年十一月四日～五日
場所　宮城県仙台市「浄土寺」
参加費　三万五千円

＊寺より五千円の助成金が出ますので、参加ご希望の方は、秋のお彼岸までに三万円と申込書を寺までお持ち下さい。

東日本大震災の津波により甚大な被害に遭われた浄土寺（中澤秀宣住職）は、仙台市にある同じ浄土宗の寺院です。以前寺報でもお伝えしたとおり、ご縁により当山にありました旧瑞正寺の御本尊他四体のお像を復興支援として寄贈いたしました。お像は浄土宗の御本尊である阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩、法然上人、善導大師の計五体です。昨年の秋には本堂と庫裡が新しく出来あがり、御本尊も無事納められました。この度の団参は新しく出来ました本堂をお参りさせて頂き、東日本大震災で亡くなられた方々へのご供養をいたしたいと思います。また檀信徒の方々におかれましては、この機会に新しく生まれ変わった御本尊などを是非ご覧頂きたいと思います。

「昨年出来上がった新しい本堂」

＊総本山知恩院御影堂（みえいどう）の大修理も完成まであと一年＊

浄土宗の総本山であります知恩院は京都の中心地東山区にあります。御影堂は大殿とも呼ばれ、知恩院最大のお堂で中には浄土宗を開かれた法然上人の御影がおまつりされています。

現在のお堂は寛永年間、徳川家光公により再建されたもので平成十四年には国宝に指定されています。

平成二十三年に法然上人八百年大遠忌を迎えるにあたり、この御影堂の半解体を伴う大修理が発願されました。

この大修理にあたりましては、全国の浄土宗寺院に対して知恩院より浄財寄進のお願いがあり、当山におきましても寄進及び仏具と瓦の特別寄進を護持会費より納めております。知恩院からは御礼として、御影堂屋根の葺き替えにあたり、従来あった瓦を当山に永久貸与されております。現在客殿に常時展示しておりますのでお参りの際にご覧下さい。八年がかりの大修理もあと一年となり、平成三十二年四月には落慶法要も予定されております。生まれ変わった御影堂が今から楽しみです。

「素屋根の一部が取れ姿を見せた御影堂」

（貞林院瑞正寺）